

# The Relation between Serum Endostatin Level and Carotid Atherosclerosis in Healthy Residents of Japan:Results from the Kyushu and Okinawa Population Study(KOPS)

加藤, 禎史

<https://doi.org/10.15017/1931779>

---

出版情報 : Kyushu University, 2017, 博士 (医学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 : CC BY-NC-SA

(別紙様式2)

氏名	加藤 禎史			
論文名	The Relation between Serum Endostatin Level and Carotid Atherosclerosis in Healthy Residents of Japan: Results from the Kyushu and Okinawa Population Study(KOPS)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	二宮 利治
	副査	九州大学	教授	北園 孝成
	副査	九州大学	教授	馬場園 明

### 論文審査の結果の要旨

エンドスタチンは、基底膜を構成する細胞外マトリックスの18型コラーゲンC末端のフラグメントであり、内在性の血管新生抑制因子として発見され、血管新生阻害作用および抗腫瘍作用を有することから抗癌剤としての開発が進められている。一方、近年、エンドスタチンが、血管障害における細胞外マトリックスのリモデリングに伴い血清エンドスタチン値が上昇するとの報告が散見される。本研究では、血清エンドスタチン値と潜在的な動脈硬化の指標である頸動脈硬化との関連について調査した。

2010年と2011年に九州2地域の住民健診を受診した1,057人のうち、研究参加非同意者、降圧薬および血糖・脂質降下薬服用者を除いた648人の健常者を研究対象とした。対象者を血清エンドスタチン値の中央値(63.7 ng/mL)で2群に分類し、超音波検査で評価した頸動脈の平均内膜中膜複合体(IMT)値を比較した。その結果、血清エンドスタチン高値群は、低値群に比べ平均IMT値は有意に高値であった(0.71 ± 0.14 vs. 0.65 ± 0.09 mm, P<0.001)。共分散分析を用いて他の動脈硬化危険因子による多変量調整を行ったが、この関係は変わらなかった(0.67 vs. 0.64 mm, P = 0.029)。

以上の成績は、血清エンドスタチン値が潜在的動脈硬化性変化のマーカーとして有用であることを示唆するものであり、この方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験は、まず論文の研究目的、方法、実施成績などについて説明を求め、各調査員より専門的な観点から論文内容およびこれに関連した事項について種々の質問を行ったが、いずれについても適切な回答を得た。調査委員合議の結果、試験は合格と判定した。